第二十四卷　第一號

西川如見と其の地理學

内田秀雄

一、略傳　二、著書　三、地理學思想　四、結語

一

西川如見に關しては、最近、二三の研究の發表せられたものがあり、私も曾て彼に論及するところがあつたが、(註一)その何れもが、彼の著述の一二に就いての數理地理學、乃至世界地理と稱せらるべき地圖學史上のものに關する論考であり、地理學史の一面より觀たるものである。しかるに、地理學史の他面であるべき地理學思想史、換言すれば地理的環境論史上の彼が今尚省みらるべくして省みられてゐないので、よつて、私は主として、この方面の彼を甚だ蕪雜・且不徹底ではあるが、考察してみたいと思ふ。

そこで、先づ、順序として、彼が一應の傳記を述べる必要がある。彼の傳記は、その盛名のあつた割合に詳細には傳つてゐない。これ、他に理由もあらんも、おそらくは、彼の次男にして、家學を繼いだ忠次郎正休が擧げられて、徳川家人となり、（後述）罪を蒙り、閉居を命ぜられ、身亡・家斷せられたことに依るのであらう。明治三十一年十一

月、明治の印刷業界にその人ありと言はれ、求林堂を復興した如見の後裔と稱する西川忠亮が、如見の全集とでも言ふべき「西川如見遺書」十八卷を刊行したが、同家には何者をも傳はらず、民間流布本を底本として、これを刊行した由であるのも、この間の事情を物語るものではあるまいかと思ふ。

彼の傳記として、最も古いのは、寛政四年版行の池永豹著すところの「諸家人物誌」の記事である。これよりも稍後れるけれども、信ずるに足るものは、盧千里が文化二年（如見の歿後九十一年）に撰出した「先民傳」であらう。これは早く内田銀藏博士も參考書として第一に擧ぐ可きものとせられたものである。と言ふのは、千里は如見と共に將軍に召されて江戸に出向した草拙の子であり、草拙は又如見と小林謙貞の同門であつた草碩の子であるから、如見と盧氏一門とは深い關係にあつたのであり、且つ、千里は「先民傳」を父の遺命に依つて完成したものであるからである。

新しいものでは、「西川如見遺書」の卷頭に掲げられた細川十洲博士撰の西川如見傳があり、博士の記述の特徴として創見に滿ち、且つ、これ迄の中では、最も詳細である。

この他、「先民傳」「諸家人物誌」などを根據として記述されたものに遠藤利貞「日本數學史」、辻善之助「海外交通史話」、内田銀藏「近世の日本」、横山健堂「近世教育史」、藤田元春「日本地理學史」、岩根保重「蘭學創始以前長崎に於ける萠芽期の近世地理學」（地球、第二四卷）などの如きものもあるが、何れも簡單、若干これに觸れてゐるに過ぎぬ。

西川忠英、次郎右衞門と稱し、如見と號し、又恕軒・恕見・求林齋・淵梅軒・崎江頑夫・崎江釣淵子などとも號した。慶安元年、長崎に生れた。(註二) その祖父忠政は寛永七年呂宋に、同十三年にカンボチヤに渡航したことがあると傳へ

らる。以てその家柄が察せられる。父忠益は早世（三十八歳）し、よく母に事へた。寛文十二年、彼の二十五歳の時、京都の儒者で、經濟の學に精しく、典故に通じてゐた南部艸壽が、時の長崎奉行牛込忠左衞門重忝の招聘に應じて、長崎に來たり、聖廟を立山に建てゝ、鄕學を設けるや、彼も就いて、その門人となつた。彼の思想が高遠な抽象理論的なものでなく、實際的な現實的なものであるのはこの師の影響かと思はれる。

併せて、天文・曆數の學を林吉左衞門の門弟なる小林謙貞（義信）（天如三年歿、如見三十六歳）、澤野忠庵の「乾坤辯說」の著述に關係した向井元升などに就いて學んだ。當時としては、洋の東西を兼ね修めた最も新步せる學者として次第に重きをなすに至つた。

支那先儒の諸說を涉獵し、加ふるに支那に入つた所謂戎蠻の學をも參看し、その造詣の深き、天文・地理に關する著述の博引傍證、眞に驚く可きものがあり、洵に「能ク其類ヲ盡シタ」（遠藤利貞）ものである。これも典故に通じてゐた師の關係であらう。先民傳にも謂ふが如く「殆將レ老矣、然於レ學不ニ小廢一」の有樣が思はれるのである。

享保四年七月（一說に享保三年）、[註三]彼の七十二歳の時、小林謙貞の門人、盧艸拙と共に、時の將軍、吉宗に召されて、江戸に下り、天文・曆數に關する諮問に應じた。勿論、身分が異ふから直接面會したのでなく人を通じて下問に應答したのである。賞賜あつて、歸されたが、後著述する所の天文地理書を錄呈した。然し、彼の所說も結局、漢土傳來の說を敷衍したのみで、所謂舊法であるから、將軍改曆の意志には添はなかつたものと思はれる。吉宗はこれより先、享保二年、京都の曆算家、中根白山を召して、曆道に關して、下問したが、彼は漢土に曆の眞理を論述せる書あれど、多

く禁書中にあり、故に其舶載の許されんことを乞うたことがあり、その後二年にして、當時の長崎の最新智識の如見等を召すことになつたものであるが、彼如見が西洋天文地理書（漢譯されたもの）を内々見てゐたが、尙不徹底であつたので、そこで、愈ゝ白山の言ふが如く禁書の解となつたものであらうと推察される。故に彼の出府の翌、享保五年、宗教外洋書輸入の解禁されるに至つたのは、如見が消極的な原因となつてゐるのであるまいか。

この間天文・地理に關する多くの著述をなした。一說に譯官に任ぜられたとあるが、(註四)これは誤りと思はれる。

享保九年九月廿四日、七十七歳を以て、長崎にて歿し、(註五)これを同地の長照寺に葬つた。大正五年十二月、特に正五位を贈られた。

彼に二子あり、長男を正昌と謂ひ、次男を正休と言つた。共に父の學を繼ぎ、その著述の編纂を助けたこと少なからず、特に正休は江戸に出て、家學を教授し、その算學は必ずしも深奥ではなかつたが、他流と相關せず、自ら一特色あり、西川流と稱した。「天經或問」・「天文名目抄」を訓點、開版し、元文五年十一月、舉げられて、幕府の家人となり、靑木文藏と同じく、寺社奉行支配、十人扶持を與へられ、曆術測量御用として、吹上御苑内勤務を命ぜられた。後、寶曆元年、罪を蒙つて、閉居を命ぜられ、身亡び、家斷絶した。江戸本所、妙源寺に葬つた。かくして學者としての如見一家は一旦こゝに廢絶することとなつた。

二

彼の著書は天文・地理に關するものが大部分で、その主要なるものは、前にも一言した如く、明治三十一年「西川如見遺書」と題して刊行せられた。

（イ）天文學關係のもの

*敎童曆談　貞享二乙丑年　全三卷
右旋辯論　元祿十二己卯年　全二卷
兩儀集說　正德四甲午年　全八卷
廣書曆象俗解　享保五庚子年　全二卷
天文義論（兩儀集說外記）　全二卷
天人五行解　全二卷
*天文和歌註　全一卷
天文精要（和漢變象怪異辯斷）　正德四甲子年の序文あり　全八卷

（ロ）地理學關係のもの

*華夷通商考　元祿八乙亥年　全二卷
四十二國人物圖說　正德四甲子年　全一卷

增補華夷通商考	寶永五戊子年	全五卷
日本水土考	享保五庚子年（元祿十三庚辰秋七月の序文あり）	全一卷
兩域人數考	同前	

（八）その他に關するもの

長崎夜話草	享保四己亥年	全一卷
町人囊	同前	全五卷
町人囊底拂	同前	全二卷
百姓囊	享保六辛丑年	全五卷
水土解辯（氣運盛衰辯、葬法之辯）		全一卷
幹枝數源		全二卷
運世年卦考		全一卷
紫清粹語		全一卷

以上の他、如見の著述乃至若干編纂に關係したものと思はれるもので、彼の死後、子供の忠次郎正休によつて、出版されたものに次の如きものがある。

天　經　或　問　　享保十五庚戌年　　全三卷
大略天學名目鈔　　享保十四己酉年　　全一卷
和漢運氣指南後編　　享保十二丙午年　　全一卷
三代歲首建正辯　　寛保四甲子年　　全三卷

備考　＊印は西川如見遺書に收められてないもの。日本經濟大典にも日本水土考以下數部收められてある。年號は出版の年を示す。

これらの著述の中、地理學思想を窺ふに足るものは、地理學關係として擧げておいたものは、勿論であるが、「天文義論」「兩儀集說」「町人囊」「百姓囊」「水土解辯」などの如きものの裡にも卓拔なる地理學的思想が含まれてゐる。

三

如見が我が國地理學史上に占むる位置に就いては、既に先學の衆口一致せる「世ニ西洋學術ノ我邦ニ傳ハリシハ新井君美ニ始マレリト謂フト雖モ如見カ西洋學術ヲ傳ヘタルハ其前ニ在リテ創闢ノ功自ラ掩フヘカラザル者ナリトス」(註六)「我邦最初の西洋地理學者」(註七)「草創期我國地理學界の第一人者」(註八)の如き讃辭が呈せられてゐるが、これは主として彼の世界地理書とでも言ふべき「四十二國人物圖說」「華夷通商考」の著述によつて批判せられてゐるのである。

「四十二國人物圖說」はその序文にもある如く、當時、多く刊行せられてゐた利瑪竇の「坤輿萬國全圖」を基として

作られた、「萬國總圖」（四十國入物圖）と稱するものを增補したもので、種々の人物圖と稱するものの中、その國數も一番多く、最も大部にして完全なものである。

「華夷通商考」には二種がある（前述）。元祿版の二卷本と、寶永版の五卷本とであるが、いづれも、世界地理書である。更めて、解題するまでもないのであるが、前者は上卷に於て、中華十五省、下卷は朝鮮・琉球・大寃・東京・交趾等から印度歐洲等の通商地の地理が示してある。後者は第一と第二卷とが支那、第三卷は朝鮮・琉球・台寃・東京・交趾・母羅伽・ジャガタラ・瓜哇・バンタン等、第四卷には阿蘭陀を始め歐洲各國、第五卷は「外夷附錄」として、以上四卷に漏れた所を揭載してゐる。前者に比較して內容充實した地理書である。前者は白石の「西洋紀聞」（正德五年）（註一〇）に先んずること二十一年である。これ細川博士が創闢の功と言はれた所であるが、これは支那傳來の再輸入であり、白石のそれは直接輸入されたものが主となつてゐる。こゝに兩者の間に截然たる區別が存する。その「華夷通商考」の表紙の見返しに「支郡天竺舉道程土產人倫於風俗」と言つてゐるのを見ても解せらるが如く、天正から慶長にかけての西洋智識である。しかし乍ら、この書は江戶時代を通じて、世界地理の重要なる參考書の一であつた。（註一一）

尙、「增補華夷通商考」の序文に於いて、如見は元祿版「華夷通商考」は他人の僞作で、寶永版のものが自作の如く言つてゐるが、實は兩方とも彼の作で、寶永版の方は當時禁書となつてゐた「職方外紀」の翻譯又は翻案を增加したものであらうとその內容の比較檢討によつて鮎澤學士は想像してをられるが、（註一二）このことは大いにあり得ると思ふ。卽ち、彼の師匠である儒醫、向井元升は正保四年に、始めて、聖廟を長崎の東上町に建て、儒學を興し、延寶五年元升

殁し、翌々年、延寶七年南部艸壽も歸京するに及び、京都にあつた元升の二男元成が長崎に歸へり、立山の鄕學の教授に補せらると共に、漢譯西教書の輸入を監視する書司監をも掌ることとなり、これを永く子孫に傳へたのである。同じく、稍後になるが、彼と一緒に出府したり、如見の著書に跋文をかいたりして深い交遊のあつた盧艸拙も正德年中に掌書監に任ぜられてゐるのであるから、却つて、これら交友關係から彼は親しく「職方外紀」の如き禁書を容易に見る機會に惠まれてゐたと想像し得るからである。

彼の最も代表的な地理的著述であり、獨創的なものには、小著ではあるが、「日本水土考」がある。この書は我が國土の優秀なる所以を具體的に實證的に說明したもので、いち早く平田篤胤によつて、稱讃されたものである。これに關しては後に述べることとする。

次に彼の地理思想の若干を諸書の裡より選び出してみよう。

（イ）宇宙觀

地理學者としての彼の地位を決定してゐる「華夷通商考」も艾儒略の「職方外紀」などの如きものを出てゐないし、又その「天文或問」の訓點本に西域天文家の名を列擧してゐるのが、明末淸初の耶蘇會の宣敎使の人々、例へば利瑪竇・艾儒略・龐迪我・羅雅谷・龍華民・陽瑪諾・能有綱・湯如望・畢方濟・穆尼閣などのみである點よりみて、その學問が、所謂南蠻學派のそれであることは謂ふまでもない。從つて、その宇宙論が天動說を出てゐないのも亦當然である。「兩儀集說」第一卷に宇宙圖を揭載してゐるが、それに依れば、地球は「永靜不動」のものであり、月は「微動」し、

日は「一日一行、一度在二於上下之中天一而照二上下一、爐二養萬物一、至德至神之君火也」と述べ、「天行左遷、七曜右旋」のことを記述してゐる。

地球の形狀に關しては、勿論圓形論で「天球之中」にあつて、あたかも雞子黃の靑內にあるが如く宙にあるものであると「月令廣義」の說を祖述してゐるが、その際、白石の「西洋紀聞」などとは異つて、この說、最近の紅毛の說と言ふけれども、唐土に於いては、旣に數千年の昔、「虞書」にこれを喝破せるものがある旨を論じてゐる。こゝに彼の學問の深さがあり、東洋を主とする所の自主的な精神が現はれてゐるのである。

この他、潮汐・日食・月食の如き數理、自然地理學的事項に關しては比較的正しく、且精細に說明を與へてゐるが、これらは總てこゝで問題とする範圍外に出ると思ふので省略に從ふこととする。

(ロ) 世界觀

彼の世界觀、地理的視野も亦、勿論、利瑪竇や艾儒略を出てゐないのであるから、利瑪竇作「坤輿萬國全圖」、三才圖會所載の「山海輿地全圖」、職方外紀所收の「萬國全圖」、「天經或問」卷中の「大地圓球諸國全圖」の如きものの亞流と考へれば良い。(註一三)「增補華夷通商考」の「地球萬國一覽之圖」と稱するものは、利瑪竇の世界圖を赤道以外の經緯線を除いて、簡明にしたものである。

この他、「兩儀集說」「天文精要」「天文義論」「怪異辨斷」などには雜駁ではあるが、多くの珍奇と思はれる地理的諸事實が列擧されてをり、それには夫々の彼一流の合理的說明が加へられてゐる。これが又當時に於いては可成り

權威あるものとして通用してゐたと見え、例へば、「甲子夜話」に文政七年八月十三日、關東並に奥羽地域に颱風と共に白い毛の降つたことを誌し、その解說に如見の「怪異辨斷」に依つて、「西南の蠻夷に大國甚多し、其國大鳥の羽毛畜獸の毛に似たる者多く有之未日本中華に於て無之所の者也、其鳥數千百群飛で遠く山海を往來するに如何なる故にや其翼下の毳毛を落すことあり、其毛風氣に乘じて遠く降れるを雨毛と云へり」と引用說明してゐる。

次に、彼が既に暖・正・冷の太陽と地球との關係よりみたアリストテレスの所謂五氣候帶說を「月令廣義」に據つて記述してゐることは、彼自らも「是等ノ說ハ何モ當今ノ說ニシテ地理測量ノ正實古人ノ未發ノ處天學ノ測證トスベシ」（兩儀集說）と誇つてゐるが如く、我が國、最初の氣候五帶論の導入である。

その地理的事實に關する知識は未だ必ずしも、これの稱すべきものは無いが、その思索の方法、推理、論斷の方法が、世界地理的見地、換言すれば、普遍的妥當性を有するや否やを常に考慮してゐる所に彼の地理學者としての態度が觀られる。例へば、世界が次第に衰へて行くと言ふ悲觀論に對して、支那や日本が、さうであつても、世界萬國がさうであるとは限らず、支那は「天地萬國に對しては百分が一にも及ぶべからず」自國のみを以て輕々しく決論してならぬと主張してゐる（水土解辯）が如き、又、日本國を研究するに當つても、世界的見地に立つて、比較考究し、外國の資料に依つた方が正しく判斷されるとし、徒らに、よしの髓から天のぞく式の偏見に陷つてならぬことを主張してゐる（日本水土考序文）。洵に立派な科學的、地理學的な考へ方と言はねばならぬ。

（八）日本觀

彼の我が國土觀は、「日本水土考」に見られるのであるが、これは早くは平田篤胤によつて注意され、河野博士も「正しく、國家主義に、裏書する底の價値を有するものである」[註一四]とせられ、彼の更に評價さるべき旨を述べられたが如く、當時としては、甚だ時流を拔く卓見を持してゐたのである。これに就いては、私も嘗て一言したこともあるが、[註一五]更にこれに附加するならば、彼は先づ、萬國を例に依つて、五大州に分ち、アジア州を以て「第一界」となし、「以二第一界一爲二水土之正一也」とし、日本はそのアジアの東にあり(日本水土考)、日本の東は「天下第一溟海遠濶之處」(日本水土考附圖、說明文)であるとし、大海を前に控へてゐることを誇らしげに圖示してゐるのである。

日本の東には亞墨利加と言ふ國があるが、「圖ヲ推シテ方角ヲ言フトキハ日本ノ東方ニ在ト云トモ、地理形勢ノ子細ヲ窮ムルトキハ皆此地ハ西方ニ屬スル者也、然ル時ハ東方ノ最初ハ日本國也」(增補華夷通商考)である。方角の如きは謂ふ迄も無く、禪家の所謂本來無東西ではあるが、いやしくも便宜上東西の位相を認めるとすれば、そこに何らかの首肯さるべき標準を求めなければならぬ。彼がこれを地球に求めて、その東西性を主張したところに、科學性・地理學性が認められても良いと思ふ。これはあたかも彼の北島見信のホルチス・ヤマトの主張を思はしめるものがある。

日本は萬國の東にあり、アジアの東北にあるから、朝陽の始めて照し、史記にも謂つてゐる如く「東北神明之舍」であるから、我が國の神國であるのも水土の自然の然らしむる處である。日本は又四時「中正中道而陰陽中和」の國であつて、世界萬國廣大と雖も日本の如き氣候の良い所はない。これは日本が赤道を去る二十七八度より四十二三度の正帶中にあるからである。又、日本を昔しから、粟散の小國と言つてゐるが、世界を察するに決して小國にあらず、

却つて支那や印度の如き國土の廣大に過ぎるものよりも都合がよい。

日本は又要害堅固の國である。大國に隣接してゐる小國は大國に屈せられるものであるが、日本は大國に接してはゐるが、灘海を以て隔つてをるが故に、その侵略の難をのがれた。洵に「日本風水要害之好萬國最上也」「住二乎浦安之大域一、備二于千矛之武德一而永久與二天地一無レ窮矣。此民者神明之孫裔而此道者神明之遺訓也。愛二清淨潔白一樂二質素朴實一者則仁勇之道而智自足也。是此國自然神德也。豈不レ貴哉」（日本水土考）と島の保護性を强調してゐる。

右の外、方位による五行說より我國の萬國にすぐれたる所以を論證してゐるのであるが、當時としては、けだし、珍らしい實證的な議論であると言はねばならぬ。支那思想に若干は禍されてはゐるが、日本國土の優秀性を比較的科學的に解釋してをることに注目すべきであらう。

（二）水土觀

この水土思想こそ、彼の地理學的思想の根幹をなすものであり、彼の思想の特質でもある。彼はこの水土なる言葉を好んで使用してゐるが、元來、水土とは書經に「帝曰僉咨禹汝平水土」とか、左傳に「生其水土而知其人心」とか、或は、漢書に「越人緜力薄材（中略）然而不可入者以保地險而中國之人不能其水土」とか、又三國志に「不習水土必生疾病」などとあるものに依るもので、又は地誌的な著述にも既に隋代に、沈瑩の「臨海水土異物志」なるものがあり、我が國に於いても、和名抄の十卷本の天地部の中に水土の項が設けられてある。降つては、山鹿素行は「中朝事實」（寛文九年、如見二十二歳）の中に「中國之水土、卓二爾於萬邦一」と掲げ、水土論を可なり述べてゐるが、同じく熊澤藩山（元祿四年歿）

も亦「世の儒學者より見ては、大簡にて莊老の道にちかきといふ程になくては、日本の水土、今の時節にはかない侍らじ」とか「佛法は水土にかなふ處あり、儒法は水土に應ぜず」「日本の水土による道あり」(集義外書)とか、或は「行ふこと日本の水土に叶はず」「いはんや日本の水土により立られたる神道の本は義理なれば」(集義和書)などの如く、この思想を述べてゐるのであるから、彼が初めてこの言葉を使つたのではない。しかし彼の如く、水土思想を主張し、「日本水土考」の如き單行本に水土なる題名を施してゐるのは、彼を以て始とし、又、終りとするのである。

彼は山川・草木・位置・方位・氣候などを含む動かすべからざる自然地理的事項を指して、水土と言つてゐるのであつて、さきに述べた「日本水土考」はこの思想が最も良く現れ、地理的環境論より日本國・日本歴史・日本人の萬國に無比なる所以を說明し解釋したものである。

日本が位置の關係からみて、氣候的にも四時中正の國であるから、その住民もそれに相應じて美であり、更に「京畿在二其中央一而相二中於正氣之中線一者亦希也、是等日本京都人物大美者也」と述べて、中央的位置を占むる京都の住民の大美を相關論的に說明してゐる。或は先にも一言したが如く、地的環境に加ふるに數・方位・五行說の如き神祕思想より說を成して、天皇が日神の後裔にましますこと、日本國號の由來、豐葦原瑞穗國、日本人の仁愛心・武勇心・至健之氣風・心胸虛無・樂天的傾向、日本女性の美容・端麗・孝順・貞烈なる所以を水土相關論的に論斷してゐるのである。

該博な世界的知識を有し、加ふるに天文學に精通してゐたがために、土地の不同、季節の變化に就いての正確な認

識を有し、地域に對する觀念が頗る強い。流石、「四季八季、寒暑不同、地之五帶」の說を紹介し、地球と太陽との關係を正しく認識してゐただけのことはある。

農業は謂ふ迄も無く、原始產業であり、天然自然と關係する處、最も多いものであるから、農人に啓蒙的に書いた「百姓囊」にこの水土思想が特に強く現はれてゐる。同書第二卷に、

おの〳〵その土地の氣候、方角の氣運にしたがいて、尤差別あらん。天の時の春夏秋冬は、日本六十餘州同時なりといへども、東西南北、土地の方位に從て、風雨雪霜、旱水寒熱溫冷、おの〳〵ひとしからず、此故に草木萬物、みな同じき事なし。都て天氣の運行は一樣なりといへども大地に受くる所に、はなはだ不同ありて、六十六國は六十六のかはりあり、深く心をつけて、おの〳〵應、不應の子細を詳に察すべし。一草一木を植るといへども、其地の方位を考ふる事なき時は繁榮することなし。

或は又同書に右と大同小異のことを繰返へし、

東西百里相隔りては地氣大に異なしといへども、南北は百里相去時は、その地氣寒暑尤大に不同あり、一遍に種藝すべからず、農家心得べき事なり。

と緯度的氣候變化を正確に論じ、更に論を進めて、卷五には、

農人の第一知るべき事は、天の時にしたがひ、地の利によつて、（中略）地の水土潤燥、東西南北、陰陽の差別を知て、おの〳〵その水土の寒暖を察して、おの〳〵その水土に應じて耕稼、種藝を致せるを地利によると言ふ

なり。

更に、同じやうな事を、しば〳〵繰返してゐるのであるが、これは、恐らく、當時流行の宮崎安貞の「農業全書」(元祿十年初版、百姓靈の刊行より二十四年前)に對する補遺ともみられないことはない。卽ち、彼もこの全書を左の如く推薦してゐるのであるが、該書は、農業の技術的方面のことを詳細に記してゐるが、農業と最も密接な關係にある自然環境に就いて、觸れる所が不十分であるので、この方面を特に强調してゐるのであると思はれる。「農業全書」卷之一、農事總論に、「天の氣により土地の宜きに順ひ、時を以て耕作をつとむ」とか「其外南北の違ひ、其寒溫により想應不相應ありて」などとあるが、不徹底である。

農業全書と言る有、農人是を讀見るべし。尤諸國地氣水土の不同、方差と雖、先大略肝要を知て後、委細を尋ぬべし。(中略)

農業は前人の書に詳なり。此ゆへに今こゝに脫しつ。(百姓靈、卷二)

しかしながら、個々の地域の差異に就いては自著に盡し難い。「委くは地理學の人に習ひしるべし」とか「其國にてはその地の天氣を考へ知るべし」「浦里の天氣は漁夫船夫に尋ぬべし」などと言つてゐる。これに由つて觀るに、彼に於いて水土相應思想、卽ち地域觀念の徹底してゐることが察せらるのである。

更に、水土と文化との關係論の二三に就いて觀るに、

水土と文學

本朝の事は神と歌との二みちの外は、多くはもろこしよりつたへしなり（中略）たとへ人の國より傳へ來りしまゝにてもてひろめしも、此國水つちのをのづからのすがたにうつりゆくさま（中略）ふしぎにやんごとなき神のわざなるべし（町人靈底拂卷上）

文學はもとは支那流のものであつたが、次第に同化されて、「淸くやすらかな」ものになつた。これ「水土の理りにかなふ」ものである。「其國に生まれたるは、その國の國のすがたにうちしたがへるぞ、天地のみちならしかし」（同上）と言つてゐるのは、國家主義的思想の權化とでも言ふべき宣長の思想――凡て萬の事も物もみな皇國ぞ本にして他國々へおのづから流れ及びたるものにて、（中略）吾が彼に似たるには非ず（記傳卷十七）――のあまりにも烈しき獨斷的な外來文明排斥論に比較して、著しく中正な、我が同化力を力說した國土觀であり、總てを日本化する奪きみくに振りを認識してをり、宣長の如き偏狹に陷つてゐないのを我々はとらねばならぬ。これも地理學の學風でもある比較考察（ヘルダイヘン）の結果と言ふべきであらうかと考へる。

水土と食物

我が國の神社に於いて肉食を禁制することは、上代にはなかつたやうであるが、現在はこれが禁ぜられてゐる。ただ例外として、信濃の諏訪神社だけは肉食してゐるけれども何の祟りもない。これは「上古の神明、水土の寒熱を察し給ひ（中略）おの〳〵其水土の氣に隨ひ給ひて、食物の禁好を定め敎へ」給ひしものであらう。

元來「日本水土の差別南海の諸國日輪運行の線道に近く、太陽寒水の海潮の氣を受くる事强くして、溫暖濕熱の氣

に屬する」故に肉食は不適當である。然るに「信州諏訪郡は日本第一の寒地也。湖水凝凍して、人馬氷上を往來す、地氣尤寒燥なり」故に「肉食の溫補をもつて身體を養はしむ。寒國とい共海潮に近く、濕熱の氣多き水土にては肉食を忌べき理なり」(町人葬底 拂卷下)

勿論、この肉食を禁ずる所以の理解に誤りはあるけれども、食肉禁斷の實行し得たのは彼の指摘したが如く、我が水土の性質に依る所も亦大なるものがあつたのであつて、彼が諏訪神社除外例の原因をこの風土性に求めたのは流石、水土學者だけの卓見と言はねばならぬ。

水土と宗教

「佛法は天竺の水土相應の教也」その經典「藏經二千五十八部九千七百餘卷」に達し、甚だ、複雜多岐である。しかも、印度の南部は既に他國に併呑された。かゝる教は「百世不易の要害の國」にして「みな其好む處清潔に淡薄をよしとす、おもく、しつこきは」我が國の「水土の神風」でないから相應しない。然るに「末代儒佛の書多くなり、唐土天竺の學を翫ぶ人多くなり」「今の如くなれば」「やまとだましゐを失ひてん」と惧れられるのである(同、卷下)。

水土と葬法

「水土解辯」卷頭に「庚午の秋誰人の作れるにか、水土解と名つけし書を見侍りしに、神儒佛のおこる處、おの〳〵其水土によるの說、喪法の法、時所位に應ずるの辯論、其道の主意分明にして、多年のまよひおよそ解たり」と述べてをるが、元來「水土解辯」なる書の一部は「水土解」の著者が火葬の方法が我が國の水土に適してゐると言ふのに反對

し、土葬こそ我が水土に應じたものであると、我が國の風土・傳統の上から駁論したものである。

しかし、注意すべきことは、葬法論には「水土解」の著者と反對の立場に立つけれども、その水土思想には讃意を表してゐることで、前述の如く「多年のまよひおよそ解たり」と言つてゐる。こゝにも彼の論風が見られるのである。

尙又、「町人囊底拂」に、

すべて唐土より傳へたるわざも、此國にはおのづから此國の氣風に變化するがゆへに、つたへのまゝにては此水土のことわりにそむける理なれば、

と述べ、徒らなる直輸入を排すると共に、自國の文化に誇りを感じてゐる。こゝにも彼の水土相應の思想が觀られ、よく内外の別を認識してゐたことが知られ、宣長の言ふ「皇國の學者のあやしき辯」（玉かつま卷十一）に彼の墮してゐないことが解かる。然も、かかる考へが、何れも彼の如く眞實に世界を知つて、卽ち外的考察によつて、始めて可能であることに注意しなければならぬ。

彼は以上の如き水土觀を有し、文化に影響する外界の環境に注目したが、一方尙、五行說や神祕的な數の力を信じ、この立場を十分に放棄することが出來なかつた。されど、中世的な陰陽・宿曜說の如きは、これを理由なきものとして排斥した。「諸星吉凶辯」（和漢運氣指南後編）に於て、

七曜二十八宿ノ義ハ言フニ及バズ、衆星共ニ各ニ所屬ヲ立テ、彼星ハ何レノ日ニ屬シテ其日ヲ主リ且又年月ヲ主リテ吉凶各性アリトス、又某星ハ木ヲ主リ某星ハ水ヲ主リ又ハ火ヲ主リ或ハ土金ヲ主レルモノアリテ各ニ其性吉

凶禍福アリトイフコト根本ハ天竺ヨリ起リテ、唐土是ヲ傳ヘテ專ラ星宿ヲ年月日時ニ配シ或ハ萬物ニ配屬シテ其變占和漢天文家ノ談ズル所古今勝テ計ルベカラズ（中略）七曜列星ハ唐土日本ノ爲ノミニ運行スルニアラズ、世界萬邦ノ爲ニコソ旋ル物ナルヲ唐土日本ノ萬物ノミニ配屬シテ名號ヲ立テ、吉凶禍福ヲ定メシコト理ニ疎キガ如シ（中略）紅毛等ノ立ル所モ唐土日本ニ定ル所ノ列宿ト甚異ルアリ（下略）。

とし、又

二十八宿ノ性氣ヲ定メ吉凶ヲ分ツ事ハ戰國以來ヨリノ俗說ニアラズヤ。畢星ヲ水トシ、雨トナスハ畢ノ形魚ヲ援フ網ニ似タリ、仍テ水ニ屬ス（中略）皆如ㇾ此（中略）是非ノ驗證難ㇾ知。日本ノ人ニ僻疾アリ、唐人ノ言ル事行フ事トサヘイフ時ハ皆信仰シテ珍トス。

或は又「天文義論」に、

中華天文家ノ主トスル處、列宿ヲ以テ九州ニ分配シテ其星宿ハ某州ヲ主リ（中略）屬スルトスル（中略）天上衆多ノ星辰ヲ以テ唐土一邦ニ占探テ其天變ノ唐土而已ニ與リ任ス、義理無キガ如シ。

その論旨甚だ明快、間然する所なきが如しである。これも亦彼の世界的知識、比較の精神の所產と言ふ可きであらう。次に、彼の空觀と共に是非一言しなければならないのはその時觀である。彼は廣き世界的視野を有すると共に又よく時代を達觀してゐたのである。

中世を支配した末法觀は近世に入るに及んでも容易にその埒を越えることが出來なかつた。佛教的世界觀は次第に

その權威を墮しつゝあつたとは雖も、これと代つた儒教に於いても、佛教のそれと一味相通じた堯舜の時代に憧憬する一種の尙古思想があり、社會進歩の觀念は仲々現はれて來なかつた。この間にあつて、橘守部はその著「神風問答」や「神代直語」に於いて、「世ハ衰フル物ニハアラズ」「漸々ニ隆リユクモノ也」とか或は「末代なりなど思ふべからず」と述べて、世の中の次第に榮えることを述べた。(註一六) しかしながら彼はこの世運の進歩發展を以て、神の意卽ち御靈布由なる神祕的なるものに歸し、尙中世的な考へ方を脫することが出來なかつたのであるが、守部より五十七年も先に生れたる如見が略これに類する思想を發表してゐるのは流石該博な知識を有せしがためなりと言ひ得るのであつて、この點だけでも彼のため特筆大書しなければならぬと思ふ。「水土解辯」に、

天地の始終今漸く半を過ぎて、其氣運おとろへ、草木金石まで性弱くなり、人間は病氣無氣力のみ多く（下略）

昔しは長壽の人も非常に多かつたが、今は世くだり短命の者多しとする尙古思想に反對して、かかることを言ふけれども、それは、

世界萬國のうへをもつて考へたるか、唐土日本のうへをもつて考へたるか、唐土日本の時運かくのごとく成とて、天地萬國なべてかくの如くなるべしといふべからず。夫唐土は天地萬國に對しては百分が一にも及ぶべからず。世界萬國樣々であるから、管見を以て徒らに獨斷的に推論してならぬ。「天地ひとしく開闢せしものならば、衰もさかりもひとしかるべき事なるに、かくの如く萬國の氣運むら〳〵にて、一樣ならざる道理あるべき事あらず」中國旣に衰へたと言ふが、僅の年數を以て考へてはならぬ。

天地氣運の盛衰畢竟これなく、天地無始無終、「時變盛衰の定數なく、まして萬國一時に盛衰變改するの定數なし」とし、社會が必ずしも、進歩發展するものであると確言はしてゐないが、「氣運おとろへる」と言ふ思想には反對してゐる。而して、守部が社會の進歩を認め、その原因を尙神祕的な神の力に歸してゐるのに反して、その原因の如何には言及してゐないが、彼の說明の如何に合理主義的であり近世的であるかが解せらるであらう。

かくの如くであるから、人間も亦元來平等無差別のものであつて、その環境に依つて差別が生ずるのであると言つてゐる。人間不平等の原因を外的原因に求めたところに、地理學者としての面目があり、常に外界をみてゐる者としての當然の考へ方をしてゐると言はねばならぬ。「町人囊」卷五に、

畢竟人間は根本の所に尊卑有べき理なし、唯生立によると知るべし。傾城は多くは下賤なる者の子なれども、幼少より風流にみがき立る故に諸人を誑はすほどの姿風俗となれり、況や人間本心の上におゐて何ぞ貴賤の差別あらんや。

勿論、この思想が彼のみに依つて主張されたと言ふのでない。儒者の中に、これに類する思想を主張したものもある。本鄕式部が「ヤハリ人ノ始ハ蟲ノ生ヤウニ生タモノ故、（中略）貴人ヂヤトテモ、何モ民百姓ニ異ツタ事モ（中略）ナイ、云々」と言つたり、室鳩巢が「不亡鈔」に於いて「もと人に貴賤なし。唯、人望に依て貴を生ず」と稱して、[註一七]「王侯將相寧有種乎」的な平等主義を振りかざしてゐるものもあるが、士農工商の別を立て、本質的に輕重本末の別あり、「天人地の三才始まり候より此かた人の命數には貧富同じからず候事すなはち貴賤同じからず候ことの如くに候」[註一八]とす

るのが蓋し、一般の通念であつた當時としては又一種の進歩思想でもあつた。

最後に、彼が地理學なるものに對して如何なる考へを持してゐたかを述べるならば、天文學者だけにその地理學は所謂數理地理學的なるもの、卽ち世界の陸水の分布狀態の研究を以て地理學とし、水土の狀況を明察しそれに對應する道を發見する環境論的思想をも地理學として主張してゐる。「兩儀集說」卷七に、

地理ノ學ハ夫國ノ方位ヲ測リ窮ルニアリ（中略）唐土ニオイテ地理ノ學ト言フハ只唐土一國ノ內ニ屬テ一里一屋ノ地ニ至ル迄其水土山川ノ風景ニ因ツテ各吉凶禍福利不利ノ異アルヲ撰ミ家宅ヲ營ミ陵墓ヲ築ク事ヲ占ヒ考フ是ヲ地理ノ學トス。但シ是ハ小地理ノ學ニシテ陰陽祿命家ノ所レ主、渾地萬國ノ大地理世界通例ノ儀ニアラズ。

と述べてゐるが、更に「天文義論」下卷に、

地ハ太虛ノ中ニ在テ、大氣舉レ之、燥以乾レ之、濕以潤レ之、寒以堅レ之、風以動レ之、火以溫レ之、云々、是地理學ノ祖トスベシ、蓋シ、大地ヲ總テ論スル地理アリ、一國ヲ辨スルノ地理アリ、一鄕一郡ノ地理アリ、一家一宅ノ地理アリ、其地理ヲ撰ムニ日影能照シテ濕毒ノ氣ナク清水能潤澤ニシテ汎瀾ノ憂ナク、風能通シテ鬱滯ノ氣ナク土地堅固ナルノ處人ノ居宅トシテハ疾病不レ生廟墓トシテハ死體安穩也、一鄕一國ニ於テモ各其不同アリテ或肥饒或腴悴ナルモノハ皆風水ノ子細ニ因テ也、是ヲ以テ一草一木ヲ植ト云共風水ヲ撰ム事無ンバ不レ可レ有、是上古風水ノ吉凶ヲ撰ムノ主意也、然ルニ中古以來陰陽祿命家ノ徒興リテ專ラ其子孫ノ禍福ヲ說テ其弊今ニ至テ不レ止、但日本ニ於テ强テ風水ノ吉凶不レ說、是還テ上古ノ風ニ近シ、何ソ子孫榮福ノ爲ニ地理ヲ撰ム事ヲ爲ンヤ、禹王善

ク洪水ヲ治メ玉ヒシモノハ能中華ノ地理ヲ極メ知玉ヒシガ故也、日本ニ於テハ先ツ日本ノ地理ヲ辨ヘ知リ、天竺ノ地理風水ヲ極メ可レ知也、萬國各吾國ノ地理ヲ知テ後他ノ國ノ地ヲ可知。

と論じてゐるが、その言ふ所は素朴ではあるが、現代地理學の主張する所の人文地理學思想であり、鄉土地理學の提稱である。この思想及び態度が、彼の全著述に溢れてゐるのであつて、自主的な、大地に根ざせる確實な、主張をなし得た所以である。

四

萬卷の書に親しみ、當時としては最も進歩してゐた知識を有してゐた如見の地理學的思想はその大要は以上の如きものである。その數理地理學は南蠻流のものであつたが、よく世界の大勢に通じ、その議論は常に世界的見地に立つて、卽ち最も普遍妥當的に思考してゐた。この點に彼の主張の科學性が認められる。

勿論、彼の思想の中には、既に中世的な神祕的な宿曜說や陰陽說の如きものは、これを理由なきものとして排斥されてはゐるが、尙五行說や神祕的な數の觀念などを十分に放棄することが出來ず、名著と言はれる「日本水土考」に於いて、むしろ、五行說・數の說を以て日本國土の優秀性が解釋されてゐる位であるが、これは、當時の彼としては蓋しやむを得ない所であつたのであらう。否、この點にかへつて、彼の眞個の面目があり、彼が地理學思想史上の位置も決定されるのではあるまいか。卽ち、前代の中世的な思想には最はや飽き足らないが、尙、前代の殘映から十分

にぬけきることが出來ず、足は前代に尙着いてゐるが手は旣に新時代にとどいてゐると譬へることが出來るであらう。

かくして、私は彼の地理學者としての位置は、勿論時代的にはかなり隔りがあるけれども、近世フランスの思想家ジヤン・ボダン（Jean Bodin 1530-1596）が地理學者として占むる地位にあてはまるものではないかと思ふ。（註一九）

ボダンがヒポクラテス、プラトー、アリストテレス、ストラボー、ポリビウス、ビトリビウス、ベジシユスなどを祖述したのは、如見が支那古代の諸說を祖述し、更に南蠻の諸說をも取入れてゐるのによく似てをり、ボダンが世界各地とその住民と文化との關係を世界地理的見地より自然環境論的に考察し、氣候による文化の異同に注目し、佛國の優秀なる所以を說明し、その說明に尙古代思想の殘映なる占星術や四元素說や神祕な數（七や九、またその產物なる六十三が總ての個々の生活に深き意義を有するとする）に支配されてゐることの少くないことは、如見が世界地理的に地域の認識を基として、水土學の上から現象を解釋し、彼がボダンの如く南方の住民はサタン及びビーナスに依つて支配されてゐるから、空想的で肉慾的であるなどと言つてゐるが如き、宿曜說からは全く解放されてゐるが、尙支那古代思想なる方位說・五行說・數說に支配されてゐるのと頗る相似てゐる。

惟ふに、ボダンがルネッサンス史上の最初の人物の一人とするならば、如見の如きも亦我が國近世學問興隆の一先驅者と見得るであらう。

（昭、十三、九、七稿、同、十一、二十五補訂）

附記　史料に關して御高敎を賜はりし森銑三、室賀信夫の兩氏に對し、末筆ながら玆に感謝の微意を表する次第である。

註（一）　岩根保重「蘭學創始以前長崎に於ける萠芽期の近世地理學」地球第二四卷第一號四一頁

鮎澤信太郎「江戸時代の世界地理學史上に於ける職方外紀に就て」地球第二四卷第二號三八―四三頁
拙稿「我が國土觀の變遷」史林第二二卷第一號七八―八〇頁

（二）岩根學士の前掲論文中に「慶安三年長崎に生れた」とあるは元年の誤植ならんと思ふが、或は別に據られた所があるかも知れない。
河野省三博士「國學の研究」三三八頁に、長崎の學者西川如見（萬治元年一六五八―享保九年一七二四）とあるは、如何なる資料に依られたるにや。これも恐らくは逆算十年の誤ならんかと思ふ。

（三）岩根學士の前掲論文、泰平年表、辻善之助「海外交通史話」等は三年説をとつてゐるが、先民傳、諸家人物誌等には四年とある。

（四）諸家人物誌には通事に任ぜられたとあるが、如何なる史料に依れるにや。辻善之助博士の「海外交通史話」には特に通事にあらずと斷つてある。又、通事の記錄にも彼の名は見えない。從つて、前掲拙稿に通事と記しておいたのは訂正されねばならぬ。

（五）先民傳、諸家人物誌、國史大年表などには九月二十四日とあるが、細川十洲の西川如見傳、新撰洋學年表には八月十日とある。今は前者に從つておく。

（六）西川如見遺書　細川十洲西川如見傳

（七）藤田元春「日本地理學史」三二四頁

（八）岩根保重　前掲論文、四二頁
その他、辻善之助「海外交通史話」大槻如電「洋學年表」など皆第一人者として推してゐる。

（九）内田銀藏「近世の日本」四九頁

（一〇）白石の「西洋紀聞」は普通寶永六年の著述とせられてゐるが、村岡嗣典校訂岩波文庫の底本なる大槻本（これは又白石の自筆本に依る）に依る。

（一一）鮎澤信太郎　前掲論文
（一二）同　前
（一三）秋岡武次郎「地圖學史」一九頁以下
鮎澤信太郎　前掲論文
同　「日令廣義所載の山海輿地全圖と其の系統」地理學評論第十二卷第十號
（一四）平田篤胤「古道大意」下卷
河重省三「國學の研究」三三八—三四〇頁
（一五）拙稿　前掲論文
（一六）河野省三　前掲書　一七頁、四四九—四五〇頁
（一七）同　同　五二—五三頁
（一八）新井白石「白石建議」白石全集第六卷一六〇頁
（一九）小林秀雄「フランス史學とジャン・ボーダン」史苑第十卷第二號
Franklin Thomas: The Environmental Basis of Society. chap. IV. p. 48—54.